

## ウイトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

### ——「家族的類似」に係わる部分——

黒 崎 宏

以下は『哲学的探究』の中で、特に「家族的類似」に係わる部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

なお、[ ] は私の挿入である。また、[ ] をとばして読んでも、文章は通じるようになっていいる。原文のイタリックにはアンダーラインをつけてある。

65. ここに於いて我々は、この様なあらゆる考察の背後に控えている大きな問題に逢着する。——何故なら、人は今や私に次のように反論するかもしれないから：「君は安易な道を歩んでいる！ 君は、あらゆる可能な言語ゲームについて語っているが、しかし君は、一体何が言語ゲームの——したがってまた言語の——本質であるかを、何処に於いても語ってはいないのである。[君は、] 何が、これら全ての「言語ゲーム」と言われる] 事象に共通しており、そして、それらの事象を言語 [ゲーム] 或るいは言語 [ゲーム] の部分となすのか [を、何処に於いても語ってはいないのである]。したがって君は、当に君自身がかつて [『論考』で] 最も頭を痛めた探究の部分、即ち、命題のそして言語の一般形式を探究するという [問題の] 部分 [(それは『論考』で6として結実した。)] を、[今は] なしで済ませているのである。」

そして、[——とウイトゲンシュタインは答えて言う——] その通りなのである。——我々が言語 [ゲーム] と呼ぶものの全てに共通な何かを述べる代わりに、私はこう言っているのである：或る一つのもの——

それが在る為に我々が「言語ゲーム」と言われる] これらの事象全てに「言語ゲーム」という] この同じ [一つの] 語を用いるところの、或る一つのもの——その様なものが、それらの事象 [全て] に共有されているわけでは全くなく、——それらの事象は相互に多くの様々な仕方で血縁関係にあるのである。そしてこの血縁関係あるいは諸血縁関係の為に、我々はそれらの事象全てを「言語 [ゲーム]」と呼ぶのである。私は [これから] この事を明らかにしようと思う。

66. まあ例えば、我々が [ゲーム] と呼ぶところの事象について、考察しよう。私は、盤ゲーム、カードゲーム、ボールゲーム、格闘ゲーム、等々、を思っているのである。何が、これら全てに共通しているのか? ——「それらには何か或るものが共有されていなくてはならない、さもないと、それらは「ゲーム」とは呼ばれないから。」[など] と言ってはならない。——そうではなく、それら全てに何か或るものが共有されているか否かを、良く見るべきなのである。——何故なら、君がそれらを良く見れば、それら全てに共有されている何か或るものを見出す事は無いとしても、しかし君は、[そこに] 類似性や血縁関係を見出すであろうし、しかも [場合によっては、] 或る完全な系列をも見出すであろうから。先に言った事を改めて言えば、こうである：考えるな、見よ! ——例えば、盤ゲームを良く見よ；そこには、多種多様な血縁関係がある。さて、カードゲームに移ろう；君はここに、盤ゲームとの多くの対応物を見出すが、しかし盤ゲームに於ける多くの共通な特徴は消え失せ、別の特徴が現われている。次に我々がボールゲームに移れば、[カードゲームに於ける] 多くの共通な特徴が保たれている一方、多くの特徴が失われている。——これら全ては、「娯楽」であろうか?。チェスをミュールファーレン [子供の遊び] と比較せよ。[(チェスは必ずしも娯楽ではない、というのであろう。)] 或るいは、如何なるゲームにも勝敗あるいは競争があるのであろうか? [独りトランプの] ペイシェンスについて、考えよ。[この場合には、勝敗も競争もない。] ボールゲームに於いては、[一般には] 勝敗 [や競争] があるが；しかし、子供がボールを壁にぶつけてそれを取る遊びをしているときには、勝敗 [や競争] は無くなっている。[それらのゲームに於いて、] 器用さと運が演じる役割に就いて、良く見よ。そして、チェスに於ける器用さとテニスに於ける

器用さが、如何に異なっていることか。さて、ライゲン遊び〔輪舞のようなもの?〕に就いて考えよ；ここには、娯楽の要素があるが、しかし、〔ゲームが一般に有する〕その他の特徴が如何に多くの消え去っている事か！この様にして我々は、ゲームの実に様々な集まりを通過する事が出来る。〔そして我々は、それらに於いて〕類似性が現われては消えるのを見るのである。

そして今や、これらの考察の成果は、こうである：〔様々なゲームを順次見てゆくと、〕我々は〔そこに〕、相互に重なりあい交差しあう〔種々の〕——そして、大きな或るいは小さな——類似性の、複雑な網状組織を見るのである。

67. 私はこの類似性を、「家族的類似性 (Familienähnlichkeit)」という語によってよりも、より良く特徴づける術を知らない；何故なら、家族のメンバーの間に成り立つ——体格、顔つき、眼の色、歩き方、気質、等々に於ける——種々様々な類似性は、〔当に〕その様に相互に重なりあい交差しあっているのであるから、——そして、私はこう言うであろう：「ゲーム」は一つの家族を構成しているのだ。

そして同様に、例えば色々な種類の数〔——基数、序数、自然数、整数、有理数、無理数、実数、虚数、複素数、等々——〕も、一つの家族を構成しているのである。〔しからば、〕何故我々は、或るものを「数」と呼ぶのか？ さようそれは、その或るものが、人がこれまで数と呼んで来た多くのものと、或る——直接的な——血縁関係を持っているからである；そして、この事によってその或るものは、我々がやはり数と呼ぶ他のものと、或る——間接的な——血縁関係を持つのである——と言えよう。そして〔この様にして〕我々は、我々の数の概念を拡張するのである；それは丁度我々が、糸をよる際に、繊維と繊維をより合わせるように、なのである。そして〔ここで注目すべき事は、〕糸の強さは、何らかの繊維がその糸の全体を貫いて通っている事にあるのではなく、多くの繊維が相互に〔ずれながら〕重なりあっている事にあるのである〔、という事である。〕

しかし、もし或る人が「そうであるとすれば、そのような〔多くの〕ものの全てには、或るものが——即ち、それらの間で〔部分的に〕共有されているもの全体の選言的結合が——共有されているのである。」と

言おうとするならば、——私はこう答えるであろう：そのように言う事で、君はただ言葉を弄んでいるのである。[もし君のように言うとするれば、] 人はまた、こうも言うことが出来よう：糸の全体を貫いて或るものが——即ち、繊維の間断なき重なりが——通っている。[そして勿論これは、言葉の遊び以外の何ものでもないであろう。]

68. [対話者は言う。]「よろしい。そうであるならば、君にとっての数という概念は、かの一つ一つ相互に血縁関係にある諸概念——基数、[序数、自然数、整数、] 有理数、[無理数、] 実数、[虚数、複素数、] 等々——の、論理和として説明されるのだ。そして同様に、ゲームという概念は、対応する[多くの]部分概念の論理和として説明されるのだ。[多くの部分概念に共有される本質が見出せないというのなら、それらの論理和——「または」で結んだもの——をもって当該の概念とすればよい、と言うのである。] —— [しかし、ウイトゲンシュタインは言う。] そうである必要はない。何故なら、[確かに] 私はその様にして「数」という概念に確固たる境界を与える事は出来る；即ち私は「数」という語を、[その様にして] 確固たる境界を与えられた概念に対する記号として、用いる事が出来る；しかし私は「数」という語を、その概念の範囲が境界によって閉じられていない様にも、用いることが出来るのであるから。そして我々は確かに「ゲーム」という語を、その様に用いているのである。一体、ゲームという概念は如何に閉じられるというのか？ 何がなおもゲームであり、何がもはやゲームではないのか？ 君は[ゲームという概念の]境界をはっきり言う事が出来ますか？ 出来ないでしょう。君は[ゲームという概念に]境界を引く事は出来る；何故なら、[ゲームという概念には]境界は未だ全く引かれてはいないのであるから。(しかし、君がこれまで「ゲーム」という語を用いたとき、この[ゲームという概念には境界は未だ全く引かれてはいない、という]事が君を悩ますことは、全く無かったのである。)

[対話者は言う。]「しかしそうすると、語の使用という事は、規則によって規制されてはいない事になってしまう；我々が語で行なう「[言語] ゲーム」は規則に従ってはいないわけだ。」 —— [ウイトゲンシュタインは答える：そんな事はない。大切なことは、こうである；] [言語] ゲーム [というもの] は、隅から隅まで規則によって縛られている、と

いうわけではないのである；しかしまた、例えばテニスには、人がボールを打つ高さや強さについての規則など、存在しないが、[したがって、テニスというものは、隅から隅まで規則によって縛られている、というわけではないのであるが、]しかし、テニスはやはりゲームであり、規則も持っているのである。[そして勿論、同じ事が言語ゲームにも言えるのである。]

69. [対話者は問う。] それでは、一体我々は或る人に、ゲームとは何であるかを、如何に説明するのであろうか？ [ワイトゲンシュタインは答える。] 私の信じる处によれば、我々はその人に、[先ず様々な] ゲームを記述して見せるであらう；そして我々はその記述に、「これら、そしてこれらに似たものを人は「ゲーム」と呼ぶ。」と、付け加えることが出来よう。[我々は、この様にして、人にゲームの何たるかを説明するのである。]そして、そうであるとすれば、我々自身は、[我々がこの説明で与えたものよりも、]より多くの事を知っているのであろうか？ [知らない]のである。更にまた、]例えば我々は、他人にのみ、ゲームとは何であるかを、正確に言うことは出来ないの[であって、我々自身には、ゲームとは何であるかを、正確に言うことが出来るの]か？ [やはり、そうではない]のである。——しかし、これは無知ではない。[何故なら、]我々は[ゲームという概念の]境界を[そもそも]知らないのである[から]；何故なら、その様なものは全く引かれてはいないのであるから。先に[第68節で]言ったように、我々は——或る特定の目的のために——[或る概念に]境界を引く事は出来る。[それでは]我々は、そうする事によって、初めてその概念を使用可能にするのか？ その特定の目的のために、というのでないならば、全くそうではない！ [例えば、]1歩=75cmという定義を与える人が、[初めて]「1歩」という単位〔概念〕を使用可能にする訳ではないように、或る概念に境界を引く人が、その概念を使用可能にする訳ではないのである。そして、もし君が「しかし以前には、「1歩」という概念は、不正確な単位であったのだ。」と言いたいならば、私はこう答える：よろしい；それなら、それは不正確な単位であったのだ[、としよう]；——とはいえ君は、なお私に正確という事の定義を与えるという、義務を負うのである。

70. [対話者は言う。]「しかし、もし「ゲーム」という概念には、この様に [—そもそも初めから全く引かれてはいない、という意味で—] 境界が与えられていないのならば、実は君は、「ゲーム」という語で君が何を意味しているのかを、本当は知らないのだ。」—— [ワイトゲンシュタインは答える。そうではない。例えば、] 私が「大地は完全に植物で被われていた。」という記述を与えるとき、——君は、私が植物に就いての定義を与えることが出来ないうちは、私は、私が何を語っているかを、知らないのだ、と言いたいのか？ [もしそうであるとすれば、それは間違えである。]

私が「大地は完全に植物で被われていた。」という記述を与えたときに、私が意味していた事についての説明は、例えば、或る絵を描き、そして「大地は大凡その様に見えた。」と付け加える事であろう。おそらく私は、「大地はまさしくその様に見えた。」とも言うであろう。—— [ここで、対話者は問う。] そうであるとすれば、[この絵に描かれている] これらの草と葉は、この姿で、まさしくそこにあったのか？ [ワイトゲンシュタインは答える。] そうではない。「大地はまさしくその様に見えた。」という事は、[この絵に描かれている] これらの草と葉は、この姿で、まさしくそこにあったという事を、意味してはいない。そして私は如何なる絵をも、この [まさしくその通りという] 意味で、正確なものと認知してはいはしないのである。

---

[ワイトゲンシュタインの脚注] 或る人が私に言った：「子供達に [何か] 或るゲームをやって見せてくれ。」[そこで] 私は彼らに、お金を賭けてする「さいころゲーム」をやって見せた [(原文では、教える)]。そうしたら、彼は私にこう言った：「私はその様なゲームを意味してはいなかった。」この場合、彼が私に「子供達に [何か] 或るゲームをやって見せてくれ。」と言ったとき、[その様な] 「さいころゲーム」は、排除されるべきものとして、念頭に浮かんでいなくてはならないのか？ [勿論、そんな事はない。第692-693節を参照。]

---

71. 人は、「ゲーム」という概念はぼやけた境界を持った概念である、と言うことが出来る。—— [そこで、対話者は問う。]「しかし、ぼやけた概念は、そもそも概念なのであるのか？」—— [ワイトゲンシュタイ

ンは、答えて言う。おそらく君は、問うであろう：] シャープではない [肖像] 写真は、そもそも肖像写真なのであるのか？ [と。しかし、] 確かに人は、シャープではない [肖像] 写真をシャープである [肖像] 写真で置き換えた方が、常に好ましい結果を得る事が出来るのか？ シャープではない [肖像] 写真こそが、しばしば、当に我々が必要とするものではないのか？

フレーゲは概念を領域と比較して、こう言う：人は、ぼやけた境界を持つ領域を、そもそも領域と呼ぶことは出来ないであろう。恐らくこれは、我々は、ぼやけた境界を持つ領域では、何事をも始めることが出来ないであろう、という事を意味しているのである。——しかし、「君はおおよそこの辺りに立っていよ！」と言うことは、無意味であろうか？ 私が或る人と或る場所に立っていて、彼に「君はおおよそこの辺りに立っていよ！」と言う、という場面を想像せよ。この際私は、[彼が立っているべき範囲を線で囲むなりして、] 何らかの境界線を引くことなどせず、例えば手で——あたかも彼に或る一定の点を指示するかの如き——指示の動作をするだけなのである。そして人は、当にその様にして、例えば、ゲームとは何であるかを、説明するのである。[即ち] 人は、[彼に様々なゲームの] 例を与え、そして、それらが或る意味で [彼に] 理解される事を望むのである。——しかし、かく言うことで私が意味している事は、今や彼はそれらの例の中に、私が——何らかの理由で——言い表すことが出来ないところの、或る共通なもの [(本質)] を見出すに違いない、という事ではない。かく言うことで私が意味している事は、今や彼はそれらの例を、或る一定の仕方で用いるに違いない、という事なのである。例を与えるという事は、ここでは、説明の——よりよい方法が無いので採られた——間接的な方法ではないのである。何故なら、如何なる一般的説明も、誤解され得るのであるから。我々は当にこの様にして [——即ち、与えられた様々な例を或る一定の仕方で用いる事によって——] ゲーム (私は、この「ゲーム」という語で、言語ゲームを意味している。) を演じるのである。

72. 共通なものを見る、という事。[原文には、段落無し。]

私が或る人に、様々に彩色された [多くの] 絵を示し、そして、「君がこれらの絵の全てに [共通に] 見る [事が出来る] 色が「黄土色」と

呼ばれるのだ。」と言う、と仮定せよ。——これは、一つの説明である；これは、他人が、それらの絵に共通なものを探し、そして、見つける事によって理解されるところの、説明である。この場合彼は、共通なものに眼をやり、それを指示する事が出来るのである。

この仮定を、次の場合と比較せよ：私は彼に、同じ色に塗られた様々な形の図形を示し、そして、「これらが相互に共有しているものが「黄土色」と呼ばれるのだ。」と言う。

そしてまたこの仮定を、次の場合と【も】比較せよ：私は彼に、様々な色調の青の見本を示し、そして、「これら全てに共通な色を、私は「青」と呼ぶ。」と言う。

73. 或る人が私に、見本を指示して「この色は「青」と呼ばれ、この色は「緑」と呼ばれ、……」と言う事によって色の名前を説明するとき、この事は、多くの点で、彼が私に或る表——色の見本の下に【「青」とか「緑」とかいう】語が付いている表——を手渡すという事と、比較され得る。——もっともこの比較は、多くの仕方で、誤解を招く可能性があるかもしれないが。【その可能な誤解の一つは、こうである。】人は今や、この比較を拡張したくなる。即ち、【人は今や、こう考えたくるのである：】説明を理解した、という事は、説明されるものの概念を心の中に持つ、という事を意味する；そして、かく言うときの概念とは、見本あるいは像なのである。【具体的には、こうである。例えば、「青」という語の説明を理解した、という事は、「青」という語の概念を心の中に持つ、という事を意味する；そして、かく言うときの「青」という語の概念とは、青の見本あるいは像なのである；何故なら、青の見本を指示して「この色は「青」と呼ばれる。」と言う事によって青の名前を説明するとき、この事は、多くの点で、青の見本の下に「青」という語が付いている表を手渡すという事と、比較され得るのであり、したがって、「青」という語の概念を心の中に持つという事は、その語の上にある青の見本あるいは像を心の中に持つという事なのである、と考えられるから。】【(原文には、段落無し。)]

【対話者は言う。】さて人が、私に様々な葉を示して、「人はこれらを「葉」と呼ぶ。」と言うならば、私は〈葉の形〉という概念を持つようになる；即ち、〈葉の形〉の像を心の中に持つようになるのである。——【ウ



イトゲンシュタインは問う。]しかしそうであるとすれば、その葉 [の形] の像——一定の [葉の] 形を示さず、「あらゆる葉の形に共通しているもの」を示す葉 [の形] の像——は、一体どの様に見えるのであろうか？ [そしてまた、]「私の心の中にある葉の」緑の「見本」——あらゆる色調の緑に共通しているものを示す「見本」——は、[一体] どんな色調を持っているのであろうか？

[対話者は答える。]「しかし、そのような「一般的な」見本は、存在し得ないであろうか？ 例えば、〈葉のパターン〉あるいは〈純粋な緑の見本〉 [といったものは、存在し得ないであろうか？]。」—— [ウィトゲンシュタインは言う。] 確かに、存在し得る！ しかし、このパターンが、或る一定の葉の形としてではなく、[葉一般の] パターンとして理解されるという事、そして、純粋な緑の小片が、純粋な緑の見本としてではなく、緑であるもの全ての見本として理解されるという事——これらの事は、やはり、これらの見本の使用のされ方にあるのである。 [(第71節を参照。)]

自問せよ：緑の見本は、どんな形であるべきなのか？ それは、長方形であるべきなのか？ そしてその場合には、それは、緑の長方形の見本 [になるの] であろうか？—— [もしそうなら、] したがってそれは、「不規則な」形であるべきなのか？ そしてその場合、我々が、それを、ただ不規則な形の見本としてのみ見る——即ち、ただ不規則な形の見本としてのみ用いる——という事がないようにするものは [一体] 何なのか？

74. この葉を「葉の形一般」の見本として見てとる人と、その [同じ] 葉を例えば [当に] その一定の形の見本として見ている人は、その葉を異なって見ているのだ、という考えも、ここで論じるにふさわしい。さて、彼らはその葉を異なって見ているのだ、という事は、—— [或る意味では、] 無いとはいえ—— [別の意味では、] 確かにあり得るのである；何故ならそれは、その葉を或る一定の仕方で見ると、通例、その葉をシカジカに或るいはコレコレの規則に従って用いるものだ、という事を述べているに過ぎないのであろうから。 [(原文には、段落無し。)]

勿論、[これとは別の意味で、或る一つのを、] その様に見たりそれとは違って見たりするという事も、存在する；そしてまた、見本をそ

の様に見る人は、見本を一般にその様に用いるであろうが、見本をそれとは違って見る人は、見本を一般にそれとは違って用いるであろう場合もまた、存在するのである。例えば、こうである：立方体の見取図を、一つの正方形と二つの菱形で構成された平面図形を見る人と、それを立方体の見取図と見る人とでは、「この様なものを何か持って来てくれ！」という命令に対しては、恐らく異なった行動をとるであろう。

75. ゲームとは何かを知っている、とはどういう意味か？ ゲームとは何かを知っているが、しかし、ゲームとは何かを語ることは出来ない、とはどういう意味か？ この知識は、言語的に言い現わされていない定義と、何等かの仕方でも同等的なのか？ したがって、もしその知識が言語的に言い現わされたならば、私は、その言い現わされたものを、私の知識の表現として認知することが出来るのか？ ゲームに就いての私の知識、私の概念、は、私が与えることが出来る説明——即ち、私は、種々様々なゲームの例を記述する；私は、如何に人は、これらの例との類比によって、他のあらゆる可能な種類のゲームを構成する事が出来るのか、という事を示す；私は、確かにもはやコレコレはゲームとは呼ばないであろう、と言う；等々、といった、私が与えることが出来る説明——の中に、完全に表現されてはいないのか？ [完全に表現されているのである。(第208節を参照。)]

76. もし或る人が或るシャープな境界線を引いても、私はそれを、私もまた常に引こうと欲していた境界線として、或るいは、[私自身は既に]心の中では引いていた境界線として、認知することは出来ないであろう。何故なら、私は全く境界線を引こうとは欲していなかったのであるから。それ故、人はこう言うことが出来る：彼の概念は私の概念と、同じではないが、血縁関係はあるのである。そして、[ここにおける]血縁関係とは、[言うならば、]——一つは、ぼやけた境界線で囲まれた色面で構成され；他は、似た形をし、似た配置をとってはいるが、しかし、シャープな境界線で囲まれた色面で構成されている——二つの絵の関係なのである。それ故、彼の概念は私の概念と血縁関係があるという事は、彼の概念は私の概念と差異があるという事が否定し得ないように、否定し得ない事なのである。

77. そして、もし我々がこの比較をなおも一層遂行するとすれば、シャープな絵がぼやけた絵に似得る程度は、ぼやけた絵のぼやけ具合に依存するという事は、明らかである。つまり、こうである。君は、ぼやけた絵に対してそれに対応するシャープな絵を描かなくてはならないのだ、と想像してみよ；[さて、] そのぼやけた絵には、ぼやけた赤い長方形があり、君はその [ぼやけた赤い] 長方形に対してシャープな絵を描くのである；勿論——ぼやけた絵に対しては、多くのそれに対応するシャープな絵が描かれ得る。——しかし、もし、そのぼやけた赤い長方形に於いて、色が相互に混ざり合い、[色の] 境界が跡形もなく無くなれば、——そのぼやけた赤い長方形に対応するシャープな絵を描くという事は、絶望的な課題になるのではないのか？ したがって君は、こう言うべきではないのか：「この場合私は、長方形を描くと同様に、円やハートの形を描くことも出来よう；[何故なら、] 今や、全ての色が相互に混ざり合っているのである [から]。[したがって、] どんな絵を描いても、当たっているものであり；また、どんな絵を描いても、当たっていないのである。」——そして例えば、美学や倫理学に於いて、我々が [日常用いている] 諸概念に対応する定義を捜し求める人は、[当に] この様な [困難な] 状況にいるのである。

この様な困難な状況に於いては、君は常に自問せよ：それでは一体我々は、語（例えば [、倫理学に於ける] 「善い」）の意味を如何に習い憶えてきたのか；[その際、] どんな例で、そして、どんな言語ゲームに於いて [、習い憶えてきたのか] ？ そうすれば、君が、語は [様々な] 意味の家族を持っていないとはならない、という事を見るのは、一層容易になるのであろう。

78. 〈知る〉と〈語る〉を比較せよ：

モンブランの高さは何メートルか——

「ゲーム」という語は如何に用いられるのか——

クラリネットの音は如何に聞こえるか——

或るものについては、知る事は出来るが、語る事は出来ない、という事に奇異の念を抱く人は——確かに第三の様な場合ではなく——恐らく、第一の様な場合を考えているのである。[我々はここに、「知る」という語は様々な意味の家族を持っている、という事を見る事が出来よう。]

79. 「モーセは存在していなかった。」という例を考えよ。もし人が「モーセは存在していなかった。」と言えば、この事は様々な事を意味し得る。即ちこれは、以下のような事を意味し得るのである：イスラエル人達がエジプトから脱出したとき、彼らは一人の指導者によって導かれたわけではなかった。——或るいは：彼らの指導者は、モーセとは呼ばれていなかった。——或るいは：〔旧約〕聖書がモーセについて述べている事を全て成し遂げた人間は、いなかった。——或るいは、等々。——ラッセルによれば、我々はこう言うことができるのである：「モーセ」という名前は、以下のような様々な記述によって、定義され得るのである；即ち、「イスラエル人達を、荒野を渡って導いた男」「コレコレの時代にシカジカの土地に生きており、当時「モーセ」と呼ばれていた男」「赤ん坊の時、ファラオの娘によってナイル河から拾われた男」等々。そして我々が、この定義をとるか、あの定義をとるかに応じて、「モーセは存在していた。」という命題は——そしてまた、モーセについてのその他の命題も、全て——異なった意味を持つようになるのである。——そして、もし人が我々に「モーセ〔原文では、N〕は存在していなかった。」と言えば、我々は「〔かく言うことで、〕君は何を意味しているのか？君は、……という事、或るいは、……という事、等々、を言いたいのか？」と問うであろう。

さてしかし、もし私がモーセに就いて何かを言うとき、——常に私には、それらの記述の中の或る一つを「モーセ」の代わりに置き換える用意があるのか？ 私は、例えば、こう言うであろう：「モーセ」という名前でもって私は、〔旧約〕聖書がモーセについて述べている事を〔全て〕成し遂げた男、或るいは、全てではないとしても、多くを成し遂げた男、を理解している。しかし、〔「多く」と言うとき、〕どのくらい多く〔ならばよいのか？〕「モーセ」という名前でもって私は、〔旧約〕聖書がモーセについて述べている事を〔全て〕成し遂げた男、或るいは、全てではないとしても、多くを成し遂げた男、を理解している、というこの私の命題を、私が偽として放棄するには、〔〔旧約〕聖書がモーセについて述べている事の中、〕どのくらい多くの事が〔、私が「モーセ」という名前でもって理解している男について、〕偽として証明されねばならないのか、という事を、私は〔前もって〕心に決めていたのか？〔決めてはいなかった。〕したがって「モーセ」という名前は、私にとっ

では、あらゆる可能な場合に於いて、或る固定した、そして、一意的に決まった、使用を持っているのか？ [持つてはいない。] いわば私は、一連の全き足場を準備しており、そして、もしその中の或る一つが取り除かれるならば、私は他の足場によって身を支える用意がある、という事ではないのか？—— [その通りである。(ワイトゲンシュタインのこの所見は、一般に「固有名の「記述群」理論 ('cluster of description' theory of proper names)」と言われ、クリプキによって批判された。クリプキの『名指しと必然性』第一講義その他を参照。)] [(原文には、段落無し。)]

もう一つ、「Nは死んだ。」という別の例を考えよ。もし私が「Nは死んだ。」と言え、名前「N」の意味に関して、例えば、以下のような場合があり得るのである：私の信じるところによると、或る一人の人が生きていた；そして、私は(1)その人を何処どこで見たのであるが、その人は(2)シカジカの風貌(面影)をしており、(3)カクカクの事をなし、そして(4)人々の中に於いては、この「N」という名前で呼ばれていたのである。—— [ここで、] 私が「N」という名前でもって何を理解しているのか、と問われれば、私はこれら全てを、或るいは、その幾つかを、そして、様々な場合に於いて様々なものを [選んで]、列挙するであろう。それ故、「N」についての私の定義は、例えば、「これら全てが当てはまる人」となる。——さてしかし、その中のどれかが当てはまらないと分かったら、どうするのか！——私にはただ副次的であると思われ事が当てはまらないと分かったときですら——私には、「Nは死んだ。」という命題は偽であるとする用意があるのであるだろうか？しかし、副次的な事 [とそうでない事] の境界は、何処にあるのか？——もし私が「N」という] 名前に [「これら全てが当てはまる人」という] 定義を与えていたならば、その様な [、その中のどれかが当てはまらないと分かった] 場合、私はその定義を修正する用意があるであろう。

そして人はこの事を、こう表現する事が出来る：私は「N」という名前を固定した意味なしに使用する。(しかしこの事は、その名前の使用を不可能にするわけではない；それは丁度、或るテーブルが、3本足ではなく4本足であるので、時にはぐらつくという事が、そのテーブルの使用を不可能にするわけではないのと、同じである。)

人はこう言うべきであろうか：私は、その意味を知らない語を用いているのだから、無意味を語っているのか？—— [この問いに対して、「そ

うである。」と言おうと「そうではない。」と言おうと] 君が事の有様を [正しく] 見ることが妨げられない限り、君の思う通りに、言いなさい。(そして、もし君が事の有様を [正しく] 見るならば、君は多くの [余計な] 事を言いほしなさいであろう。)

(学問的な定義の変わり易さ：今日、現象Aに経験上随伴する現象と見なされているものが、明日には、「A」の定義として用いられるであろう。)

80. 私は言う：「そこに椅子がある。」[そして、] もし私がそこへ行き、それを持って来ようと思ったら、突然それが私の視界から消えてしまったとしたら、どうであろう？——「そうであるとすれば、それは椅子ではなかったのである。それは、何等かの幻覚であったのだ。」——しかし、ほんの数秒して我々は再びその椅子を見、それを掴むことが出来る、等々、なのである。——「それなら、その椅子は確かにそこにあったのであり、それが消えてしまったという事 [の方] が、何等かの幻覚であったのだ。」——しかし、少し経ったら、それは再び消えてしまった——或るいは、消えたように思われた——としよう。そうであるとすれば、我々は何と言うべきなのか？ その様な場合、君は、或るものをなおも「椅子」と呼んでよいかどうかを決める規則を、既に持っているのか？ しかし我々は、「椅子」という語の使用に際して、その様な規則を持っているわけではないのではないか？ そして我々が、「椅子」という語の使用の全ての可能な場合に対して、規則を準備していない場合、その語は実は意味を持ってはいないのだ、と言わなくてはならないのか？ [勿論、そんな事はない。第68節を参照せよ。]

81. F. P. ラムゼイは、かつて私との会話で、論理学は [、「記述の学」ではなく、] 「規範の学」である、と強調した。[(かつてワイトゲンシュタインは、『論考』においては、「我々の日常言語の全ての命題は、そのあるが儘に於いて、論理的に完全に秩序づけられている。」(5. 5563) と言い、また「論理は、学説ではなく、世界の鏡像である。」(6. 13) と言っていた。したがって『論考』に於いては、論理学は或る意味では「記述の学」であったのである。そしてこの事が、ラムゼイによって、批判されたのであろう。)] その際に、彼に [——「規範の学」である、という事で——] 如何なる考えが浮かんでいたのかは、私には正確には分からない。しかしその考えは、私には後になっ

てやっと明らかになった或る考えと、[私に於いては、] 疑いもなく密接な関係があったのである。その或る考えとは、こうである：つまり我々は、哲学に於いては、語の使用を、固定した規則に従って行なわれる計算、としてのゲームとしばしば比較するが、しかし、言語を使用する人はその様なゲームをしなければならない、と言うことは出来ない。[(この後期ワイトゲンシュタインの考えがラムゼイの考えと如何なる意味で「密接な関係」があるのかは、明らかではない。しかし、一つの可能な解釈は、こうである：ラムゼイが「論理学は「規範の学」である。」と言ったとき、この背後にワイトゲンシュタインは、「語の使用は固定した規則に従って行なわれる計算である」という考えを読み取り、それを逆に批判したのである。)] ——さてしかし、人が、我々の言語表現はその様な [固定した規則に従って行なわれる] 計算にただ近似しているだけである、と言うならば、人は当に誤解の縁に立っているのである。何故なら、そうであるとすれば、あたかも我々は、論理学に於いては、理想言語について語っているかの如くに、思われ得るのであるから；[即ち、] あたかも我々の論理学は、いわば、真空についての論理学である [かの如くに、思われ得るのであるから]。——ところで一方、それでも論理学は、自然科学が自然現象を扱うという意味では、言語を——或るいは、思考を——扱うのではない。人は高々、我々は理想言語を構成する、と言えただけなのである。しかしこう言うと、「理想」という語は誤解を招く。何故ならそれは、あたかも「理想言語」は我々の日常言語よりもより良く、より完全であるかの如くに、思わせるから；そして、論理学者が人々に、正しい命題とは如何なるものであるかを最終的に示す為には、あたかも「理想言語」が必要であるかの如くに、思わせるから。

しかしこれら全ての事は、人が、理解する、意味する、そして、思考する、という概念に就いて、より一層の明確さを獲得した暁に、やっと正しく見え得る様になるのである。何故なら、その時には、或る命題を言い、そしてその命題を意味し或るいは理解する人は、同時に、或る計算を一定の規則に従って行なっているのだ、と考えるように、我々を誘惑しかねないもの (そして、[実は] 私を誘惑したもの) もまた、明確になるであろうから。

82. 何を私は「彼がそれに従って言語使用をする規則」[(原文では、事

を処す規則)」と呼ぶのか？—— [それは、] 我々が観察する彼の言語使用を満足のゆくまで記述する仮説 [であろうか]；或るいは、彼が記号の使用に際して参照する規則 [の表現であろうか]；或るいは、我々が彼に彼の規則を質問したとき、彼が我々に答えてくれる規則 [であろうか]？——しかし、もし観察しても、[彼の言語の使用の] 規則がはっきり認識されないとしたら、どうであろう；そしてまた、[いくら] 質問しても、[さっぱり] 規則が明らかにならないとしたら、どうであろう？——というのは、[例えば] 私の「君は「N」という語で何を理解するのか？」という質問に答えて、確かに彼は或る説明を与えたとしても、しかし [一般に] 彼には、この説明を取り消す、或るいは、変更する用意があるのである [から]。——そうであるとすれば、如何にして私は「彼がそれに従って言語使用をする規則」 [原文では、ゲームをする規則]」を決めるべきなのか？ [実は] 彼自身が、その [様な] 規則を知らないのである。——或るいは、より正しくは [、最初からこう問うべきなのである]：「彼がそれに従って言語使用をする規則 [原文では、事を処す規則]」という表現は、ここに於いては、[以上に挙げた3つの他に] なお何を意味すべきなのか？ [彼が言語使用を習い憶えるときに示される規則、などは、その一例であろう。]

83. ここに於いて、言語 [使用] とゲームの類比が、事の真相を明らかにしはしないであろうか？ 確かに我々は、人々が野原でボール遊びを楽しんでいる、という状況を、全く容易に想像することが出来る。彼らは、様々な既存の [ボール] ゲームを始めるのだが、大抵は最後まではやらず、その間に、ボールを無計画に投げ上げ、ふざけながらボールを持ってお互いに追いかけ合い、ボールを投げつけ合い、等々、をするのである。さて [、その様子を見ていた] 或る人が言う：彼らは、その全時間を通じて、或る一つのボールゲームをしているのである；そしてそれ故、彼らは、何時投げるときにも、或る一定の規則に従っているのである。[勿論、その様に言う必要は全くない。]

そして、我々がゲームをし、そして——「[ゲームを] をやりながら規則を創ってゆく」——という場合もまた無いであろうか？ [あるのである。] それどころか、—— [ゲームを] やりながら——規則を変更する場合すら、あるのである。



84. [第68節で] 私は、語の使用に関して、こう言った：[言語] ゲーム [というもの] は、隅から隅まで規則によって縛られている、というわけではないのである。しかし、隅から隅まで規則によって縛られている [言語] ゲーム——その規則が如何なる疑いをも侵入させず；如何なる割れ目も塞がれている [、という意味での] 言語ゲーム——ならば、どうであろうか？——我々は、[、その様な言語ゲームのために]、規則の使用を規制する規則というもの；そして、その [規則の使用を規制する] 規則が取り除く疑いというもの；——等々を、想像出来ないであろうか？ [勿論、想像出来る。]

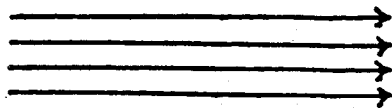
しかし、その [規則の使用を規制する] 規則が取り除く疑いというものが、想像出来るという事は、我々はその様な疑いを、想像出来るが故に持つ、という事を言っているのではない。私には、以下のような事が十分に想像可能である：或る人が、家のドアを開けるに先立って、そのドアの後ろには奈落が口を開けているのではないかと、その都度疑い；そして、そのドアを通るに先だって、その様なことが無い事を確認する（；そして、そうする事が正しかった、という事が時には実証され得る。）——しかし、だからといって私も、同じ様な場合に [同じ様に] 疑うわけではない。

85. 或る規則が、道しるべの様に、そこに書いてある。—— [さて、] 道しるべは、私が行くべき道を疑いなく示しているのか？ [或るいは、] 道しるべは、私がその側に来たとき、私が行くべき方向を [疑いなく] 示しているのか？；[もしそうなら、道しるべが私に示している事は、] [例えば、] 通りを [その方向に] 道なりに従って [行くべきである、という事] か、或るいは、[その方向にある] 野道に道なりに従って [行くべきである、という事] か、或るいは、[とにかく] その方向に道無き道を [行くべきである、という事] か？ しかし、私はどの意味でその道しるべに従うべきであるか、という事は、[一体] 何処に書いてあるのか？ [そしてまた、道しるべが指し示す方向は、] 人差指が指し示す方向なのか、或るいは、(例えば) その反対方向なのか？ [そして、そのどちらの方向であるか、という事も、一体、何処に書いてあるのか？] ——そして、もし道しるべの代わりに、道しるべの連鎖が立っている、或るいは、チョークで線が地面に引かれている、とすれば、——それら

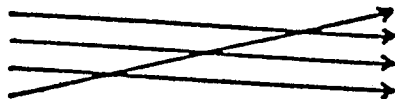
には、ただ、一つの解釈のみが存在するのか？——それ故、[その様な場合には] 私は、[その様な一種の] 道しるべは如何なる疑いをも残さない、とすることが出来る [のか?]。[そうではない。] 或るいは、むしろ、こう言うことが出来るのである：道しるべは、疑いを残す事もあり、残さない事もある。そしてこの事は、もはや哲学的命題ではなく、経験的命題なのである。

86. 第2節の様な言語ゲームが、或る表の助けを借りて、行なわれる [としよう]。A氏がB氏に与える記号は、今度は、文字なのである。[さて、] B氏は或る表を持っている；その第1列には、その [言語] ゲームで用いられる文字が書かれており、第2列には、石材の形を表わした絵が描かれている。[この言語ゲームでは、先ず] A氏がB氏にその様な文字の一つを示し；B氏はその文字を表の中で探し出し [てから]、その向いにある絵を見るのである、等々。それ故、この表は一つの規則 [の表現] なのであり、それに従って、B氏は [A氏の] 命令を実行するのである。——表の中で [文字を通して] 絵を探し出す事を、人は訓練を通して学ぶ；そしてこの訓練の一部には、例えば生徒は、表の中で指を水平に左から右に動かす事を学ぶ——それ故、いわば一組の水平線を引く事を学ぶ——という事があるのである。

ここで、表を読む様々な仕方が導入される、と想像しよう。即ち、或る時は、前のパラグラフで述べたように、次の様なパターンで：



そしてまた、別の時は、次の様なパターンで：



或るいは、その他のパターンで。——これらのパターンは、表は如何に使用されるべきか、を示す規則として、[当の] 表に付加されるのである。

さて我々は、これらのパターンを説明する諸規則を、更に想像出来な

いであろうか？ [出来る。] そして他方，[この節の] 最初に述べた表は，矢印のパターン無しには不完全だったのか？ [そんなことはない。] そして，その他の [色々な] 表は，それらのパターン無しには，不完全なのか？ [必ずしも，そうではない。]

87. [ワイトゲンシュタインは言う。] 私が [「モーセ」とは誰のことか？ という疑問に対して，] 次のような説明をすると，想定せよ：「もしイスラエル人達をエジプトから脱出させた男が存在したならば——たとえ彼が当時如何に呼ばれていたとしても，そしてまた，たとえ彼がその他に何をしたとしても，或るいは，何をしなかったとしても——その男を私は「モーセ」[という名前] でもって理解する。—— [対話者は言う。] しかし，この説明で用いられた様々な語についても，「モーセ」という名前に就いての疑問と似た疑問 (君が「エジプト」と呼ぶものは何か？ 「イスラエル人達」とは誰のことか？ 等々) が可能なのである。[ワイトゲンシュタインは答える。] その通りである；この種の疑問は [次々と生じ，] 「赤い」「暗い」「甘い」といった語に達するまでは，終わることも無い。—— [対話者は問う。] 「しかし，そうであるとすれば，或る説明が最後の説明ではないとき，如何にしてその様な説明が私の理解を助けるのか？ その様なときには，その説明は未だ仕上げられてはいないのであり：したがって私は，その説明が意味している事を，未だ理解していないのである；そしてまた私は，その説明が意味している事を，決して理解しないであろう。」—— [ワイトゲンシュタインは答える。] 説明は，もしも他の説明がそれを支えているのでないならば，言わば，空中に浮かんでいる様なものなのである。説明は，他の与えられた説明に，確かに依存し得るとはいえ，しかし，——我々が，誤解を避けるために，必要とするのでないならば——他の説明を必要とはしないのである。人は言うことが出来よう：説明は誤解を——説明が無いと入り込む誤解を——取り除く，或るいは，予防する，という事に役立つ；しかし，私に想像可能な誤解を全て取り除く，或るいは，予防する，というのではないのである。

疑問というものは，何であれ，[言語ゲームの] 基礎に存在する穴を示しているのだ，と思われがちなのである；それ故，しっかりした理解は，先ず我々が疑い得るものは全て疑い，その上で，これら全ての疑い

を取り除くときにのみ、可能なのである、と思われがちなのである。[しかし勿論、そうではない。これは、言うまでもなく、デカルト批判になっている。]

道しるべは——通常の状況に於いて、その目的を達成するならば——問題はないのである。[これが、ウイトゲンシュタインが言いたいことである。]

88. 私が或る人に「君はおおよそこの辺りに立っていよ！」と言うとき——この説明は完全に機能し得ないであろうか？ [完全に機能し得る。第71節を参照の事。]そしてまた、[同じ目的のための]その他の[様々な]説明は全て機能を発揮し得るであろうか？ [機能を発揮しない事も有り得る。]

[対話者は言う。]「しかしその説明は、そうは言っても、不正確ではないのか？」—— [ウイトゲンシュタインは答える。] そうである；人は何故その説明を「不正確」と呼んではならないのか？ [そう呼びたいければ、そう呼んでもよからう。] しかし [今や] 我々は、「不正確」という語で何を意味するのか、という事だけは理解しなくてはならない！ 何故なら、「不正確」という語は、「使用不可能」を意味しているわけではないのであるから。そして我々はなお、その説明とは対照的に、我々が「正確な」説明と呼ぶものに就いて、よく考えなくてはならない！ 例えば、チョークの線で或る範囲を囲む [という事は、どうであろうか]？ そうすると、直ちに我々には、その線には幅がある、という事が思い浮かぶ。それ故、より正確には、色の境 [で考えるべきであろう、という事になる]。しかしこの正確さは、この場合、やはり機能を有しているのでであろうか；この正確さは、空回りしているのではなからうか？ [空回りしているのである。] そして、何を以てこの正確な境界を越えたとされるべきなのか；如何にして、また、どんな道具でもって、[この正確な] 境界を越えたという事は確定されるべきなのか；等々、という事を、確かに我々は、未だ決めてはいなかったのである。

懐中時計を正確な時刻に合わせる、或るいは、懐中時計を正確に動くように調整する、という事が如何なる事であるか、という事を、我々は理解している。しかし、もし人が、この正確さは理想的な正確さであるのか、或るいは、この正確さは理想的な正確さにどのくらい近づいてい

るのか、と問うとすれば、どうであろう？——勿論我々は、——懐中時計による時刻の測定とは別の、そして言うなれば、それよりもより大きな、正確さ、を有する——時刻の測定について、語る事が出来る。その様な時刻の測定に於いては、「時計を正確な時刻に合わせる。」という言葉は、[懐中時計による場合とは、] 血縁関係があるとはいえ、別の意味を持っている；そして、「時刻を読み取る」という事は、[懐中時計による場合とは、] 別の事なのである；等々。—— [対話者は言う。] さて、もし私がある人に「君は、もっと正確に、食事に来なくてはなりません；君は、食事は正確に1時に始まる、という事を知っていますね。」と言うとすれば、——本来ここに於いての話題は、正確さなのではないのか？ 何故なら、人はこう言う事が出来るのであるから：「実験室あるいは天文台での時刻の決定について、考えよ；そこにおいて君は、[時刻の]「正確さ」というものが[本来]何を意味するかを、知るのである。」[実験室あるいは天文台での時刻の決定が、時刻の正確さの原点なのであり、それとの対比に於いて、食事に來ることの正確さが話題になる、というのである。]

[これに対し、ウィトゲンシュタインは言う。]「不正確」、それは本来非難 [の言葉であり]、「正確」、それは本来賞賛 [の言葉なのである]。そしてこの事が言うことは、確かに、こうである：不正確では、より正確な場合のように、完全に目的を達することが出来ない。それ故、ここに於ける問題は、我々が「目的」と呼ぶものは何か、という事なのである。もし私が、太陽の我々からの距離を1メートルの正確さで述べないならば、そして、家具職人に机の寸法を0.001ミリメートルの正確さで述べないならば、私が言うことは不正確なのであろうか？ [勿論、そうではない。]

我々は、正確さの [理想として] 一つの理想を予め予定する事は出来ない；我々は、その様な理想として何を想像すべきかを——君自身が、何がそう呼ばれるべきかを、確言するのでない限り——知らないのである。しかし、その様な確言——君を満足させる確言——をうまく言うことは、君にとっては困難な事になるであろう。